

茨城県生協連といっしょに平和の活動を進めている、茨城県原爆被爆者協議会会長の黒川さんが、今年の夏、長崎テレビの取材をうけました。長崎に向かってご自宅から出発される所から長崎まで、取材が続いたそうです。初めてのことだそうです。

黒川さんは、投下直後に長崎市内にはいり被爆されました。茨城県に来られて、長い間会長として、被爆者援護活動や平和活動を、精力的に進めてきました。

妹さんは世界一、爆心地に近いところで生き残った人間ということで知られています。茨城県生協連では、今夏 図書館で行われた原爆展で、妹さんの体験を描いた紙芝居を展示しました。見られた方から、いろいろな声が寄せられました。

黒川さんから体験記を寄稿いただきましたので、ご覧ください。

## 長崎原爆の前と後

茨城県原爆被爆者協議会 会長 黒川 博

昭和16年12月、米英に宣戦布告、ハワイ真珠湾の米極東艦隊を壊滅的狀態に陥れたとのニュースが流れ、皆で万歳を叫んだ。小学校6年の時だった。17年、マニラ・シンガポールを占領し、南方諸島に上陸して連戦連勝のはずだった。が、18年5月、アッツ島守備隊が全滅し、戦局は急速に暗転していった。占領していた諸島は玉砕が相次ぎ、兵卒の補充に各職域から若い人が軍隊へと駆り出されていった。その年から、学徒報国隊軍需工場に動員され、翌19年4月から正式に学徒動員が始まった。中学3年生の時、三菱長崎兵器製作所に多くの級友と配属され、私は検査工としてノギス、マイクロなどを覚えた。

人的資源の不足と同時に軍需資源も極度化し、各家庭の金ボタンを代用品と交換するなど、神仏具から鉄製のなべ・かま、格子窓の鉄棒や鉄柵、銅製の屋根瓦・雨樋なども供出させられ、長崎の守護神である諏訪神社の青銅の大鳥居も解体され、寺院の梵鐘、学校の二宮尊徳像その他市内のすべての銅像が町から消えていった。

20年3月末、以前受験して合格していた海軍の学校に入校すべく長崎を離れた。途中、踏切まで見送りに来てくれた家族や近所の人たちには、もう二度と会えないかもしれない、との思いで涙があとからあとから止まらなかった。

4か月半後、終戦。朝早く学校のあった山口県防府を発った。列車は立錐の余地のないほど混んでいたが、今日は家族皆と会えると心はわくわくしていた。時々怒号はしたが人々はあまりしゃべらなかつた。九州に入り、長崎本線になって、近くにいたお婆さんが、長崎で商業学校の方に新型爆弾が落とされ浦上の方は大変らしいと小声で話すのが聞こえてきた。新型爆弾の威力は想像もできなかったが、商業学校と家では1kmも離れているから少々強力な爆弾でも家はまず大丈夫だと思った。しかし、二つ手前の駅を過ぎたあたりから周りの

様相が全く変わってきた。見渡す限り家々はなく、工場は屋根、壁はなくて鉄骨が曲りくねり、コンクリートの建物の外観はしっかりしているようだが窓もなく中身は空洞のようだった。何よりも周りの山々は緑がなく灰色の世界だった。

そして列車が我が家の側を通るとき、帰るべき家の無いことを悟った。降りる予定の浦上駅は止まらず、長崎駅は改札業務はやっていたが、駅舎は焼けて何もなかった。夕方、薄暗くなり、如何ともしがたく駅前広場のコンクリートの上でまんじりともせず夜を明かした。翌朝、どうすべきか迷っているとき偶然、従兄弟と会い、家の焼け跡に立札がたっており父親が生きていることを知らされた。早速、重い荷物を背負い、昨日通ってきた線路沿いの国道を北へ3kmほど歩き、我が家の焼け跡に着いた。立札に書いてあった疎開先の住所、川平町伊良之迫は全く見当もつかず、尋ね尋ねて約4km、夕方になって暫く山あいの小さな小屋に辿り着いた。土間の炊事場がついた6畳一間の小さな小屋だった。そこには勤めに出て助かった父と姉二人と傷つき寝ていた妹の4人がいた。電気、水道もなく明かりはローソク、水は小屋の側を流れる小川を利用、ただし飲み水だけは近くの農家の井戸水をもらってくるのだった。部屋には中身のない箆笥一竿があり、上に木の箱が載せてあった。母と弟の二人の遺骨ということだった。何も言えず、ただ慟哭した。母は40歳だった。

8月9日は、母は近所の人に洋裁を頼まれミシンを踏んでいたが、下の子がまわりついて仕事が進まないで、三女の幸子(9歳)に妹二人(5歳と2歳)を連れて町営の防空壕のところに遊びに行くように言いつけた。町営の防空壕は丘をくりぬいた立派なもので、前が広場になっており、子どもたちの格好の遊び場になっていた。その日も多くの子どもたちが遊んでいた。11時過ぎ微かな爆音がした。その時は警戒警報中で防空壕に入る必要はなかったが、なぜか妹たちは壕に入った。その途端にピカリと光り、ものすごい爆風であとは気を失い、目が覚めてを繰り返しているうちに助けだされた。助け出したのは父だった。下の妹二人は姉の傍らですでに死んでいたようだ。二人は疎開先への途中の他所の墓場の側に埋めてきたとのことだったので、私が帰って半月ほど経って、骨にしてやろうと父と私で埋めた遺体を掘り起こし、近くの工場の焼け跡の燃え残りの木材を井桁に組んで茶毘に付した。掘り起こす前には、あの可愛い二人を思い浮かべていたが、あまりの変わりように愕然として声を失った。半月以上も土の中にいたのだから当然だろうに……。今でも臉に残っている。

10月、文部省派遣の調査団が原爆の中心を測定し、廃墟の中に壊れた径30cm程のスレート管に「爆心 Center」と縦書きした即製の標識を立てた。その後暫くして3mぐらいの木製の原爆中心地の標となり、周りが整備され原爆公園として今の黒御影の三角の標となった。わが家から120m、防空壕からも同じぐらいの所だった。従って、私の妹(三女)は世界一、爆心地に近いところで生き残った人間となった。昨年、そのことが話題になり、修学旅行生や一般団体に原爆被害を案内している平和案内人が紙芝居を作り、8月に「爆心地の奇跡

～防空壕に救われて 黒川幸子さん」として披露され、その様子がNHKで放映された。

その妹は大腿骨が折れ、全身傷だらけで、近くに医者も薬もなく、父がどこからか手に入れてきた薬の素人療法ではなかなか治らず、秋になって父の故郷、熊本県天草に連れてゆき、3か月ほどで元気になって戻ってきた。

70年は草木も生えぬといわれた被爆地に秋になると草木は芽吹き、虫も見られるようになって、その後、1年足らずのうちに旧知の人3軒が寄り添うように元の家の近くに家を建てた。本格的な建物ではなかったが、

これまでの小屋よりずっと広く、何よりも電気水道のあるのがありがたかった。300軒1, 800人が住んでいた町に3軒で暫くはさびしかったが、周りが広々としているので、食糧不足を補うため、さつま芋や野菜づくりをやった。放射能の怖さはわかっていたが、土壌についてはほとんど頭になかった。お腹を満たすのに精いっぱいだった。そして生活が落ちついていった中で、3年後に次姉が逝き、7年後に父が逝った。姉21歳、父53歳だった。明らかに原爆が原因だと思っているが、当時は何も言わなかった。というより言えなかった。原爆小頭症や障害児誕生の話は耳にしていたが、新聞にはほとんど出なかった。原爆の身体に対する影響は大したことはないというGHQの報道規制があったからである。しかし、口には出せないが被爆者は大きなハンデを背負って生きてきた。頭髪が抜け、歯茎からの出血や下痢で亡くなる人、怪我ややけどもなく生き延びた人たちの中から何の前触れもなく亡くなる人も少なくなかった。疎開した子どもたちが「原爆がうつる」といじめられた話も耳にした。とくに女性の結婚問題は深刻であった。好きあった彼の家族に被爆者ということで結婚を反対されたり、結婚した後でも離婚させられた人もあったと聞いた。女性自身、出産の折、障害児でなければいいがという願いとも祈りともいう気持ちをもったようである。3人の子持ちとなった妹は何十年たった今でもそうつぶやくことがある。

(本稿の初出は「土浦平和の会ニュース」)